『独白（どくはく）』

作者　淺羽　一

酒を飲んで風呂に浸かると、湯船の中で、左手の平に幾筋か手相が増えます。戯れにナイフで斬り付けた時の痕です。切れ味の悪い波刃のナイフでこするようにして出来た傷痕は、普段はまるで見えないくせに、のんびりと心地良いそんな時に限って浮かんできます。変に膨らんでいると言った感じの痕ではなく、今なお癒えていないような切り口が開いたままの痕です。

酒は大抵、アブサンを飲みます。水も氷も入れず、美しい緑の液体をそのまま呑みます。粘膜が焼ける刺激にはもう慣れて、今では口に含んで香りを楽しんでから飲み干します。物足りない時など、そこにジンが加わる場合もあります。やはり銘柄へのこだわりがある分、ストレートで香りを楽しむ事が多いです。この二種ではない他の酒を進んで口にする事は滅多にありません。ただ、ジンに、絞ったライムのジュースを等量加え、強く振り、作ったギムレットという名のカクテルはわりと好みます。部屋ではなく、たまにバーなどで酒を頼む時は、決まって最初にこのレシピで作ったギムレットを頼みます。むしろ、外でアブサンを呑む事はあまりありません。

車は良く運転します。勿論、酒を呑んでの運転はしません。だからあまり外で酒を呑む事もありません。助手席に人が乗っている時はほとんどありません。ましてや、後部座席にまで人が座った機会など数えるほどしかありません。運転中は必ずと言っていいほど音楽を掛けています。種類は特に定まっていません。基本的には交通マナーに則った運転を心がけていますが、速度違反だけはしてしまう事が多いです。誰かにそれを指摘されると、法定速度ではなくとも適正速度で走っているなどと言い訳をしてしまう癖があります。今時の車と比べると少なからず面倒が多いマニュアル車ですが、乗り換えるつもりはありません。ましてや軽自動車などに乗る事はおそらくこの先も一生無いでしょう。真っ赤なスポーツカーに乗るのだと、いつの頃からか決めていました。

夜、一人で車を走らせていると、急にガードレールや側壁に突っ込んでしまいたくなる事があります。これは運転中に限らず、例えば駅で電車を待っている時に線路内へと飛び込んでしまいたくなったり、はたまた夜景を見る為に高いビルの屋上へ昇った時にそのまま飛び降りてしまいたくなったり、もっと身近なもので言えば机の脇に置いてある刃物を体に突き立ててしまいたくなったりと、頻繁に湧き起こる衝動ではありませんが、かといって限定的な状況でのみ生じる思いでもないのです。実際に本気で行った事もありませんが。ただ、特別、何か辛い事があったとか、嫌な思いをしたとか、いっそ生きる事に絶望したとか、そんな大層な理由を抱いていた事もまた、一度としてありません。と言うか、自らを不幸だと嘆いたり、人生への不満を綴ったり、他者への不平を並べたり、そんな気持ちはさらさら無いのです。憎い相手がいなければ、恨む仇敵もまるで思い浮かびません。だから決して死にたいと思っての行為ではないのです。むしろ、死ぬ事は避けたいです。痛苦を快楽と混同出来る特殊な性癖も持ち合わせておりません。詰まる所、何も考えていないのです。空っぽなのです。だからこそ、そんな虚しさが生への欲求も綺麗に無くしてしまうのでしょう。辛うじて生き長らえているのは、もしくは生き残れているのは、きっと心の中に、それでも完全に消す事の出来ない想いが残っているからでしょう。

人を愛した事はあります。それは巷で囁かれるような言葉遊びや、うたい文句、その場限りの欲望の誤魔化しや、動物的な意識や社会的な教育によって刻み込まれる親子愛や家族愛などとは全く違う、理性と本能が見事に調和した、ただただ純粋に他者を唯一絶対の

存在として受け入れるという、そう言う類の愛情です。それは最早、ある意味では究極の同一視とさえ言えるのかも知れません。彼女の幸福が、自らにとっても掛け替えのない幸福であり、彼女の不幸は、自らにとっても耐える事の出来ない不幸である。きっと、それが彼女の意思による行為であったとしたならば、不意に背後から刺されたとしても笑って受け入れる事が出来たでしょう。そしてそれは、彼女が去ってしまった今も、まるで変わる事など無く。結局、この想いがあるからこそ、今も生きているのでしょうし。この想いを消さない為にこそ、これからも可能な限り生き続けていくのでしょう。その先に、再び彼女と相まみえる瞬間など無かったとしても。生きていれば、過去を想い、また未来に夢を馳せる事だけは出来るのですから。

酒を呑んで風呂に浸かると、湯船の中で、腹に大きく刻まれた十字架状の傷痕が紅く紅く浮かび上がります。一生消える事のないだろうそれは、醜い形を持って、内面の実体を表しているかのようであり。同時に、紛れもない過去の証明として、彼女が存在したという証として、いつもいつも思い知らせてくれるのです。自らの卑小さと、醜悪さと、彼女への愛の不変さと、何より彼女と出会えたと言う幸福さを。まるで一方だけでは成立し得ない善悪の真理を象徴するかのごとく、その十字架は常に肌身離れず存在しているのです。

壊れているなどと特殊を気取って普通を嘲笑するつもりはありませんし、そんな傲慢な人間でないどころか、むしろいっそ単なる日陰者に過ぎない惨めな人間だと評価されても仕方のない者だと自覚しているのですが。それでも、これが私にとってありのままの心情の吐露であり。何より、私はこんな風にしか生きられない自らを、一度として恥じた事など無いのです。

要するに、私は自らが臆病者であると自覚しているのです。

〈了〉